

「救いの歴史」

主任司祭 晴佐久 昌英

パリの中心部の7区、買い物客で賑わうボン・マルシェの裏手に、パリ外国宣教会の本部がある。ここにパリ日本人カトリックセンターがあるため、パリ在住の半年間、主日のミサや週日の講話のために足しげく通うこととなった。

おりしもアジア宣教三百五十周年ということで、様々な資料や宣教師が持ち帰った文物等を本部一階で展示していたが、そもそも建物自体が一部は17世紀そのままというだけあって、歴史の重みを感じさせる場所である。何世紀にもわたってここから大勢の宣教師たちが遠いアジア諸国へ出発してきたことを思えば、日本のカトリック教会にとってはひとつの原点とも言うべき場所だろう。

とりわけ、我が高円寺教会にとっては、ここは特別な場所である。高円寺教会創設者のギュスターブ・マイエ師は、このパリ外国宣教会の司祭だったからだ。たまたま本館の居室に案内される機会があったが、若き日のマイエ師は神学生としてここで生活し、ここで祈り、叙階して半年後にはここから日本へ向けて旅立ったのかと思うと、深い感慨を禁じえなかった。

歴史を振り返ることは大切だ。それはすなわち、神の業を振り返ることだから。パリのような古都にいと特にそれを感じさせられる。

聖イグナチオが聖フランシスコ・ザビエルらと共にイエズス会の創立を決意したのが、実はパリであることをご存知だろうか。その時一同が誓願を立てた聖堂も残っていて、これまた感慨深い。そのザビエルが命がけで伝えた信仰の火は、今も日本の教会で燃え続けている。全ては現実の歴史を貫く、神の救いの業なのだ。

宗教改革の嵐の中、真の信仰を胸に海を渡ったザビエル。市民革命以来の混乱の中、熱い信仰に燃えて船出したマイエ師。神は休むことなく救いの業を続けておられる。

パリの様々な教会に触れる機会があり、それぞれに感銘を受けたが、改めて言いたい。高円寺教会は、本当に祝福された素晴らしい教会である。今年創立80周年を迎えるこの恵みの場を大切に守り、一層輝かせよう。それは、永遠なる救いの歴史に参加することなのである。